



ニュートンの リンゴ



川路 新吉

ニュートンのリンゴ

「とうとう成功したぞ。タイムマシンの完成だ」

いかめしい機械のなかから博士があらわれると、それを出迎えた助手がその偉業をたたえた。

「おめでとうございます博士。過去への旅はいかがでしたか？」

博士はそれに対して満面の笑みで答えた。最終実験のための過去へのタイムスリップを終えたところだった。

「ああ、快適だったよ。何の問題もなく時間旅行ができた。これで温めてきた計画を実行することができる」

「温めてきた計画？ですか？」

たずねる助手に、タイムマシンから下りてきた博士は、研究室の本棚からある本をとりだし、あるページ開いて見せた。

「これを見てくれ」

それは、科学史に関する本だった。

博士が示した部分には、科学史における有名な逸話が記されていた。

『アイザック・ニュートンは畑仕事をしているときに木から落ちるリンゴをみて万有引力の最初の発想を得た』

「ニュートンの有名な逸話ですね。これがどうかしたのですか」

「実はな、私の先祖はニュートンの友だちだったらしいんだよ」

「それがどうしたのですか？」

「私の計画はこうだ。タイムスリップして、そのご先祖さまのところへ行く。そして『リンゴが木から落ちたのは万有引力のせいだ』と教えるんだ」

助手は首をひねった。

「博士、どういうことですか？申し訳ないですが言おうとしていることがよくわからないのですが…」

「君も勤の悪い男だな。ご先祖さまに万有引力について教えるんだ。そうするとどうなる。万有引力の発見者はニュートンではなくご先祖さまということになる」

「まあ、そうなるのですかね？」

「とすると、私はどうなる。偉大な科学者の末裔ということになる。こんな貧乏な研究室で研究費に困ることもなくなるというわけだ」

果たしてそんなにうまくいくだろうか。助手がそう思っている間にも、博士は過去に行く準備をすすめている。

「さて善は急げだ。早速行ってくる。帰ってくるのが楽しみだ」

そう言うと、博士はタイムマシンに乗り込み時空のひずみが発する音と共に消えた。

と、思ったらすぐにタイムマシンが出現した。

タイムマシンからは疲れた様子の博士が下りてきた。

「博士、どうしたんですか？もしかしてタイムスリップできなかつたのですか？」

「何を言っているんだ、君。タイムスリップはまったくもって成功だ。ただ単純に過去から現在に戻るときに、ここから出発した時間の直後に帰ってきただけだ」

「そうですか。じゃ計画は成功したんですね。それにしても浮かぬ顔をしているようですが。ご先祖さまがみつからなかつたんですか」

「いや、ご先祖さまはすぐに見つかったよ。だがご先祖さまにたいしてこういうのも何だが大変なおバカでな。万有引力が何たるものかを理解させるのに大変な時間がかかってしまった」

博士の話によると、ご先祖さまをみつけてから、万有引力をレクチャーするのに半年もかかってしまったそうだ。

「だが私のレクチャーでヤツは完全に理解したはずだ。結果は成功、大丈夫だろう。さて、現在はどのように変化したかな」

博士は満面の笑みで、先ほどの科学史の本を読みだしたが、すぐにその顔がくもりはじめた。

いぶかしんだ助手がよこからその本を読むと先ほどのページがほんの少しだけ変わっていた。

変わっていたのは、先ほど読んだニュートンのエピソードが書かれている例の部分だった。

『アイザック・ニュートンは、気が狂った友人が発した”リンゴは地球が引っ張っているんだ”という言葉聞いて万有引力の最初の発想を得た』

ニュートンのリンゴ

<http://p.booklog.jp/book/39413>

著者：川路 新吉

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/bowmoq/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/39413>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/39413>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのpapier (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社paperboy&co.